

持つことと失うこと(4)

「ある」から「なる」へ

津守 真

三学期のある日

三学期の一日、いろいろの子どもが自分で遊んでいるのを、私は感心して見ていた。遊びながらときどき私を見ている子もいる。手をひきにくる子もいる。しばらく一緒に過ごすと、じきにひとり何かをしはじめる。ひとつひとつを取り上げれば、とるに足りないような小さなことなのだが、毎日と一緒に過ごしている者にとってはそれらの日々と重ね合わせて驚くことが多い。どの子も何かをやろうとしている。

裏庭で先生が燃している焚火に、せっせと落ち葉を運ぶ子がいる。長い間、学校の外に出たくて、毎日のようにだれかがついて散歩にいった子どもである。ひとりで縄梯子を揺らしている子がいる。



先生を連れて職員室にゆき、チューブの糊をしぼり出してベトベトをつづけていた子どもである。真赤な顔をして水道のホースを取り合っている子もいる。以前には自分から動こうとしなかった子どもである。トイレットペーパーを流すのをつづけていたあの子どもは、土を掌の中で丸めて柵の向こうに投げるのを長い時間やっている。数え上げるときりがない。

満足して遊ぶこと、つまり自己実現とは真の自分を発見する途上にあることだろう。人が何かにとらわれているときには、真に自分が求めているのは何なのかを模索しながら、それがまだ発見できていない。そのときには、子どもは一緒にそれを考え探してくれる大人を必要としている。こうしてその糸口を見出し、それに向かって歩きはじめたときが、子どもが自分で遊びはじめる時だろう。真の自分は何かを見出す人生の旅は、幼児期にはじまって一生つづくのであろう。

真の自分というと、仮の自分や偽りの自分があるのかとの問いが生じる。これはことほの上だけの問いではない。だれもが実際にその両方を体験しているのではないだろうか。自分が本当に納得しないままに何かをさせられ、体裁だけ保ってやっているとき、人は真の自分の道を歩んでいない。たとえ外見上は人と円満にやっているようでも、自分がそこに生きていないことがある。子どもにも、仮の生活ではなく、真の自分となって歩む生活をさせたい。人が直面する状況はたえず変化するから、新たな状況の中で真の自分を発見し直す旅は終わることがない。

真の関係を求めて

真の自分の発見は、個についてのみでなく、関係についても言える。人は真の関係を求めている。

相手も自分も、それぞれが真の自分を発見するのを助けるような互いの関係をつくるという課題である。「もつ」関係から「ある」関係へ、そして「なる」関係をつくり上げてゆくという課題である。

子どもと大人との関係を考えるとき、最初は大人は子どもを保護するという面が大きい。危険な所に行かないようにたえず見張っていないなければならない時期もある。子どもは大人に監視され、大人の勢力圏の中に入れられていると感ずることもあるかもしれない。その位にしないと守れない時期もある。そのときでも私は可能な範囲で「ある」関係をつくる努力を欠いてはならないと思う。子どもが自分で移動し、自分でしはじめたことを尊重すること、未知な世界を内に秘めた存在として畏敬をもって接することはできる。

T夫が土の塊を掌の中で丸めて柵の向こうに投げるとき、石ころが中に入る。窓にぶつからないようにとの心配が先に立つと、私の目は監視者の眼になっている。私はT夫の傍に腰を下ろして見ている。それだけでT夫との間にゆとりができる。一緒に土の団子をつくって手渡すと、T夫は優しい目で私をのぞきこむ。私の心の持ち様によって関係は一瞬にして変化する。そしてT夫が土を投げる面白さは、それが金網にぶつかって音を立てることにあると私は気付かされる。そうすると私も一緒になっぴいい音を立てる物を探す。「得ることと失うこと」の意味を発見した後のT夫の行為のひとつである。それからあとT夫は危げなく半時間も自分で遊ぶ。子どもは自分で意味を発見する経験を積み重ねることによって、人間的に発達する。それを一緒に経験することによって、大人自身も強められ、一步深く人間を理解する者となっている。

「もたれ」「共にあり」そして「なる」関係へ

S夫が私の手をひきにきた。自転車につれてゆく。S夫がサドルに坐り、私が荷台に腰かけて、S夫がこいでいるかのように動かして欲しい。こうしてホールをひと回りすると、K男が荷台の私とサドルのS夫との間に乗って、「オモイ オモイ」と言う。K男が重く感じているわけではないのに、こういうことばを発するのは愉快である。子ども二人を乗せた自転車を動かすのは本当に重い。

午後からS夫は補助輪付自転車にひとりで乗って動かしていた。ひとりで苦勞しているが場所によってはなかなか動かない。とうとう私が手をかして庭を何度も往復した。

S夫はいま二年生である。二年生になったときから、彼は自分で次々と遊びを見つけて遊ぶようになった。一年生のときは、ほとんど一年間ブランコで過ごし、大人の男性が傍に居ることを要求した。その最中にはいつまでこれがつづくのかと思わされた。S夫は大人をはなさず、大人を「もつ」関係を求めたし、大人はS夫に「もたれる」者であった。保育者の側からいえば、その子が強くそれを求めるのには何か意味があるのだらうと、その子の内なる課題と向かい合おうとした。父親を失ったその子は、大人の男性に対して未解決な精神的課題が残されていても不思議はなかった。私は「もたれる」関係の中で、「ある」関係をつくらうとしていたのだと思う。

S夫は更に一年前、幼稚園のとき、校長室のソファで毎日のように私の膝の上に寝て何もしないで過ごす時期があった。そうしている間にこちらも心をきめてゆったりとした気分になると、そろそろとその子は自分で動きはじめるのだった。ある日、新しいサインペンを机の上に垂直に立てて並べ、

自分から何かをするぞと私の手を引いてホールに出ていったときのことを私は以前に記したことがある。(88巻8号)そのときにやったことが三つあった。ブランコとトランポリンと自転車だった。そして最後に大便を一杯してその日を終わった。その頃、この子は大便を少しずつ日に何度もやって、いちどきに排出することがなかった。精神的にも思い切って自分を表出することがなかったのだらう。その三つの遊びのうち、ブランコはそれから一年以上つづいたが、あとの二つはしばらくの間全くせず、その日のことは偶然だったのかと思っていた程だった。一年以上たってから、トランポリンを大人と一緒に長時間とぶ時期があった。それにつき合うと膝がガクガクになった。そして補助輪付自転車にひとりで乗ることをはじめたのはごく最近のことである。

最初に自分から動きはじめたときにやった三つの遊びを、長い月日の毎日へてすべてやり抜いたのをいま見ることが出来る。こうしてS夫は自分で遊ぶ者へとなっていた。私もまたS夫に「もたれ」、「共にあり」、そして「なる」関係へと、関係が変化してゆくのを見た。

大人も保育によって新たにになる

私は前日からいろいろなことがあって気持ちが悪く落ちこんでいたが、子どもたちの保育の場に身を置くことと忽ちそれがなおってしまう。これは私だけでなく、保育者に共通の経験のようである。それは、子どもとの関係の中で、「ある」から「なる」へと関係の成長を体験することによるのではなからうか。

暖かい冬の一日、S夫は陽のあたる庭にふとんを持ち出して寝ていた。こんな邪魔なところにねてと私はふとんを蹴とばしそうになった。そして気が付くとS夫の眼は青い空を見ている。

ふと私は少年の頃を思い出した。凧を上げた青い空、糸が切れて小さくなって見えなくなるまでみつめていた。櫛の梢の枝を透かして見た空、とんびがゆっくりと羽をひろげて滑っていた大空。空は少年の思い出と切り離せない。

大人になって長い間、私は空を見上げるゆとりを忘れていた。地上の煩わしいことだけが眼中にあった。ある日、歩きながらふと深呼吸して空を見上げたとき、少年の時の空の記憶が甦えった。そのときから私はときどき空を見て深呼吸するようになった。空を見上げるとき、大人も少年になる。

子どもと交わるとき、それを契機にして、大人は子ども時代に回帰する。それによって子どもの心に共感し、自分もまた今日の一日の歩みを新しくされる。これは保育する者の特権ではないだろうか。

(愛育養護学校)